認知的方略による遂行前思考と学習行動との関連

- 期末テストまでの時間経過に着目した縦断的検討 -

Relationships Between Forethought and Learning Behaviors as a function of Cognitive Strategy: A Longitudinal Study of the Period Leading Up to the Final Exam

○石山　裕菜[1]，木村　年晶[2]

ISHIYAMA, Yuna. KIMURA, Toshiaki.

京都橘大学[1]，近畿大学[2]

Kyoto Tachibana University, Kindai University

Key words: Cognitive Strategy, Forethought, Learning Behavior, Test Situation

目的

過去の成功経験を認知している防衛的悲観主義者は失敗可能性を想定しながら準備を進める一方，方略的楽観主義者は成功を期待し，課題直前にはその課題について考えないことで高い遂行を維持する（Cantor & Norem, 1989; 石山他, 2020）。先行研究では認知的方略とパフォーマンスとの関連が検討されてきたが，時間的経過に伴ったテストまでの遂行前思考がどのように学習行動へ結びつくのかは明らかではない。以上より本研究では，大学生の期末テストを対象とし，テストまでの時間的距離に応じた遂行前思考および学習行動の変化を捉え，認知的方略との関連を探索的に検討する。

方法

参加者　ある心理学関連科目の受講生 48 名を対象とした。調査対象者全員が同一科目を受講しており，当該科目の期末テストを対象として縦断的調査を実施した。

手続き　Microsoft Forms を用いて質問紙調査を実施した。1 か月前（T 1）では①認知的方略尺度（外山, 2015），②気分状態（一般感情尺度；小川他, 2000），③当該テストに対する目標志向/失敗予期/失敗熟考/成功熟考/計画熟考/不安，④当該テストに対する学習行動量を測定した。テスト 2 週間前（T2）およびテスト直前（T3）では，②気分状態，③当該テストに対する目標志向/失敗予期/失敗熟考/成功熟考/計画熟考/不安，④当該テストに対する学習行動量について，同一の質問項目を用いて測定した。調査は研究参加への同意を得たうえで実施した（倫理審査番号：2026-13，承認日：2026 年 5 月 22 日）。

結果

認知的方略のパターンを検討するため，認知的方略尺度（外山, 2015）の 4 下位尺度の標準得点に基づき，クラスター分析（Ward 法）を行った結果を Figure1 に示す。認知的方略およびテスト前の期間を独立変数，失敗熟考を従属変数とする二要因の分散分析を行った。交互作用（$F(6, 82) = 4.04$, $p = .001$ $\eta^2p = .23$）および認知的方略の主効果（$F(3, 41) = 6.55$, $p = .001$, $\eta^2p = .33$）が有意であった（Figure2）。防衛的悲観主義群では，T3 において失敗熟考は失敗予期（$r = .88$），計画熟考（$r = .70$）および学習時間（$r = .59$）と正の関連を示した（$ps < .05$）。

Figure1　認知的方略によるクラスター分析

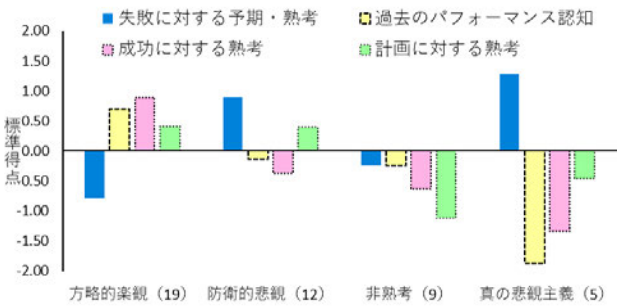
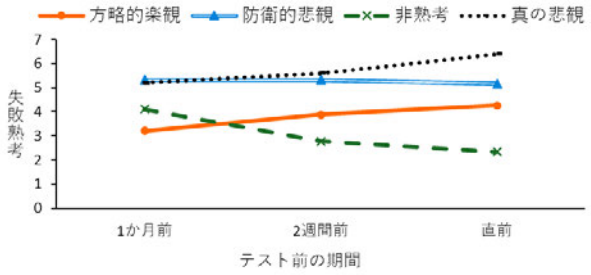


Figure2 認知的方略ごとの失敗熟考の推移



考察

本研究の防衛的悲観主義群は過去のパフォーマンス認知が必ずしも高くなかったが，失敗熟考と学習行動の関連が認められたことから，機能面に着目して防衛的悲観主義群と解釈した。また，防衛的悲観主義群では，テスト直前に失敗熟考が高まるのではなく，テスト 1 か月前から維持されていたことから，失敗熟考は学習に向けた継続的な準備機能を果たし，学習行動を支える遂行前思考として機能している可能性が示唆された。

参考文献（一部抜粋）

石山裕菜・鈴木直人・及川昌典・及川 晴 (2020). 表現筆記が防衛的悲観主義者のパフォーマンスに及ぼす影響―認知方略による調整効果の検討　教育心理学研究, *68*, 1-10. https://doi.org/10.5926/jjep.68.1

*本研究は JSPS 科研費 JP22K13803 の助成を受けた。